

広島俳句倶楽部

令和三年七月作品集

筆の里熊野に住んで 友岡崇山子

熊野は盆地に位置し、自然豊かな里である。自然の中に身を委ね、恵まれた環境で筆を作り、自然を詠んで四季の移ろいを表現出来ることは、幸せなことだと思う。

数年前から佐保先生の趣意あるご指導を受け、俳句で人生を豊かにし、俳句で詩情を詠うことを教えて頂いた。

これから俳句を心の泉として、日々暮らしていきたい。

点字打つ手を休めたり花曇

毛組みする筆司の肩に花の散る

蓮華草鋤き込んで行くトラクター

三つほど刻みて作る路の味噌

切符買ひこぼるる小銭春の暮

景桜となりし道行く登校子

サイドミラー後ろの景桜の映り

鳥はみな樹々に隠れて梅雨に入る

内職の筆の干されて青葉風

小鳥来る道を塞ぎて古物市

《作品鑑賞》

村上正人

友岡崇山子さんは、前文にも書かれている通り、佐保光俊先生の指導を素直に学ばれた作風である。筆の里熊野にお住まいで、約千五百人いるといわれる筆職人のおひとりで、このたびの「筆の里熊野に住んで」は、熊野らしさが感じられる事柄を織り交ぜつつ身の回りの季節を作品にされている。

点字打つ手を休めたり花曇

ボランテア、あるいはどなたかのために点字を打たれているのだろうか。集中力が欠かせない作業の手を休めて、ほっとした様子が「花曇」という季語から伝わってくる。

毛組みする筆司の肩に花の散る

筆の穂首をつくるため、筆の種類によって必要な原毛を選んで組み合わせる最初の工程が毛組みである。そんな折、穂やかな風に運ばれてきたのだろう。筆司の肩に桜の花が散った。

内職の筆の干されて青葉風

軸に嵌め込まれた穂首に糊を塗りこませながら、形を整える最終工程を経て、筆を干し終えたと、心地よい風が吹いていることにふと気づく。「青葉風」という比較的新しい季語が、筆を作り終えた達成感と相俟って清々しさを感じさせる。

ひろしま美術館 ふじ女

ひろしま美術館は「愛とやすらぎのために」をテーマに一九七八年開館。都市部の緑の中にあります。丸いドーム型の本館は原爆ドームを、本館を取り巻く回廊は広島神社の廻廊をイメージして造られました。入り口にピカリの子息から送られたマロニエ、その隣の池に錦鯉(カープ)が泳いでいます。本館は印象派を中心としたフランス近代絵画と日本近代絵画の常設展示。今回の特別展はアーノルドローベル展でした。アーノルドローベルの「がまくんとかえるくん」は、国語の教科書「お手紙」でお馴染みです。

天馬降る夏の白さや美術館

鈍色の石を泳いで錦鯉

夏服のドアマンは目で仕事なり

入り口のチャイム高らか夏来たる

サマードレスすらりと矢印の道へ

黒猫の影行くウインドウ涼し

新緑を過ぎてピカリのいる扉

夏帽子載せて女の絵の前に

ブロンズの少女白夜をなお踊り

ハイヒール響く立夏のリノリウム

《作品鑑賞》

村上正人

ふじ女さんは、ことばの魔術師とも言えるような巧みなことばづかいで、想像力を掻きたてる作品を次々と創られる。このたびの「ひろしま美術館」も、持ち前のことばづかいで興味深く、ひろしま美術館関係者をご覧になっても、喜ばれるに違いない作品に仕上がっている。

天馬降る夏の白さや美術館

広島市民病院を向いとする交差点の一角に、館が収蔵するル・ドン・の絵が基となる天馬(ヘガサス)のブロンズ像がある。像の後ろの館銘板、さらに館自体も白っぽい壁に覆われていて、そんな「夏の白さ」の中にまるで天馬が降り立ったようだ。

夏服のドアマンは目で仕事なり

新型コロナウイルスの感染予防対策をしつつ開館している中、入場者数制限や発熱者の発見はドアマンの重要任務である。「目で仕事」の一言が、緊張感あるドアマンの仕事表現している。

ハイヒール響く立夏のリノリウム

作品を眺め歩くハイヒールの音が静かな館内に響く。床の素材を「リノリウム」と言い切る点が、「立夏」という季節の一時点と呼応して面白い作品となっている。

青梅に人の行き来の途切れたる

梅檀の花の下より歩き出す

いつまでも蝶の来てゐる菖蒲園

真昼間の梅を揺すつて落とすなり

梅の実にいま沈みたる夕日かな

くちなしの花に一番星上がる

夏蝶へ雨の降り出し早きかな

きささげの花散りつく梅雨さかな

川下も川上も梅雨深きかな

いま過ぎし石榴の花のこと思ふ

佐保光俊

梅雨の雲山の斜面を下り来たり

河鹿鳴く沢辺を指し下りたる

雨垂れの打ちたるところ苔の花

降る雨の滴つてゐる栗の花

雨上り道に散らばる柿の花

洗ひ終へ嵌める網戸に日の差せり

梅雨晴天靴を磨いて出かけたる

両側に玄葵咲く電車道

マンシヨンの映れる川をちね遊ぶ

慰霊碑に向かひ日傘を団ぢにけり

村上正人

父母の庭に咲きたり額の花

遊ぶ子の上に泰山木の花

雲ひとつ空に流れて菖蒲園

いま草に落ちし実梅を拾ひ上ぐ

梅漬けてしばしその香に浸りをり

海からの風の吹きけり夏木立

岩剥がし蟹を採つて子の遊ぶ

錦帯橋流れにしかと鮎の見ゆ

西日さす柵に小さき実の付いて

夕焼を正面に見て帰りけり

高尾ひとみ

板塀に鉄線葛咲きにけり

鋸草人に寄り来る牛のゐて

牛小屋を通り抜けたる青田風

石崖を山羊駆け上がり夏の雲

月下美人困唾を呑んで閑花待つ

初蟬の鳴く声を聞く散歩かな

青簑片手を伸ばし腕ぎにけり

川風に乗りて聞こゆる蟬の声

空蟬の棕櫚の葉つばに連なりて

片陰のベンチに座りバスを待つ

夏雲の前を飛びゆく鳥の列

道の辺に夏水仙の並び咲く

張り替へし網戸に吹いて山の風

花芭蕉土蔵の壁に影を成し

夏萩をゆらし川原に下りにけり

よぎる蛇待ちてバスへと乗りにけり

蟬鳴くや回覧板を回す朝

蟬穴へ藁で蟬釣る子を見つめ

杏の木空蟬あまた爪を立て

滝裏に入りて滝音聞きにけり

父の日の傘を子供と選びたる

目玉焼黄身のとりりと夏の朝

蚊火香るセールスマンの去りてなほ

マスクして蠅払ひつゝ立話

甲虫の羽音激しき夜更けかな

甲虫つまめば足を広げきる

夏至の月立ち止まり見る夕べかな

夏の夜右に左に転がる子

ホイッスル鳴らし号令梅雨明けぬ

戻り梅雨床屋の灯り際立ちて

秋沙

あざみ

亜矢

梅雨の入り風がゆつくり路地を抜け

石榴咲く真昼の道に人氣なく

脇道のことに暗きや青葉山

玄葵人の過ぎ行く川の土手

ベンチの子足ぶらつかせ夏の園

花嫁はくちなし香る庭より来

玻璃越しに目を合はせたる白蛇かな

鮎を釣る五橋の下の早瀬かな

河口へと幾度もくねる梅雨の川

庭裏に電車の音や梅酒注ぐ

井藤希

万緑や展望台に我一人

藤椅子に姉の聴き入るタンゴかな

紫陽花や規則正しき薔の目

橋涼し父のサンダルひつけて

水着脱ぎ臍の周りの白さかな

夕風や洗濯物に鳥の羽根

登校の子ら見送れば初の蟬

片蔭に子猫一匹うづくまり

日雷キヤッチボールは途切れずに

雹降つて避けるものなきバイク便

栄吉

人去りてまた鳴きしきる行々子

母と子の映りてゆける泉かな

夏の花あまた咲かせて路地に住む

緑蔭の椅子を譲りて男の子

夏料理ワイングラスにハーブ添け

除草機を止めれば聞こえ川の音

ハサードマップ広げたままの昼寝かな

築地松囲む館に蟬しぐれ

滝風に揺れ通しなる楓かな

大滝を見てより寄りぬ蕎麦処

暁子

この光は一軒家なり蛙鳴く

棟梁の槌音響く清和かな

地に広く焚火の煙桐の花

白き帆の釣舟あまた青景潮

釣宿の岸壁に章魚ひそみをり

水張りし田に映りたる五月晴

やんはりと鷺の歩ける植田かな

公園の芝生を植うる梅雨曇

霏かかる大河の岸の七変化

凌霄の花を散らして小雨降る

紫陽花の車窓に続く旅路かな

笹百合の香りの届く木蔭かな

短夜や吾子の手紙を読み返し

片蔭を吾子に押されし車椅子

洗ひたる網戸に風がよく通り

星涼し車の施錠確かむる

友の来て日傘差し掛け話したる

谷風に揺らぐ大きな竹煮草

滝壺に河童の住むといふ村ぞ

千本の向日葵のなか子の駆くる

駆くる子の映つてゆける代田かな

植田へとつぎつぎ雲の掛かりたる

白目高ひとかたまりに向き変ふる

四十雀大樹の枝から枝へ飛び

梅雨晴の花の香りの濃ゆきかな

夏の夕蔓は空へと伸び上がり

網戸越しいつものやうに友通る

西日背に自転車をごく家路かな

海見ゆる窓を開いて夏館

夏の雲太平洋を流れけり

新庄憲彦

すみれ

知佳子

玄葵団地の中に咲いてをり

百枝の袋を掛けてまだ残る

退院の母草取に庭へ出る

子守する令間に母は草を取る

雨上り母と畑の草を取る

一叢の紫蘇を残して草を取る

あそこまでもうそこまでと草を取る

田舎から夫持ち帰る母の紫蘇

みつしりと梅を浸けたる母の薨

雨の中鮎釣る人の五六人

ちどり

紫陽花を抱へし人の白き腕

鮎つけて花を飾りて友来る日

浴衣着て風の通れる身八口

母の好む麻の暖簾を掛けにけり

夫の手と杖を頼りに夏の山

子の声も風も聞こゆる網戸かな

縁側の空蟬かさと風に揺れ

山思ひ海を思ひて夏の雲

竹林に吹く風のあり秋近し

それぞれに鎌持ち上る墓参り

友岡崇山子

晩暗に毛虫三十焼く樂し

日覆を下ろし全てを守る窓

スコールが髪を梳かして目を閉じて

夜の山夏の霧這う道半ば

夕立に選ばれし人逃げ走る

網戸より触角太し髪切虫

夏の夜兩岸遠く合わさりて

夕焼にスマホを向けるイギリス人

朝の庭空蟬を空に報告す

病院の後は路地裏鰻の日

ふじ女

家事を終へ新茶をひとり淹れにけり
 床に臥す母に初枇杷剥きにけり
 母さんの生成りの日傘譲り受く
 さくらんぼ口をすばめて種飛ばす
 線路脇つぎつぎと咲く葵かな
 花揺れていつしよに揺るる夏の蝶
 花栗の匂へる下を通りけり
 糸を引き目の前に蜘蛛下りて来し
 万緑や遠くに水の落つる音
 森に組む簡易ステージ月涼し

松田裕子

玄葵向うに人の気配して
 縁側に夫と並びて風薫る
 紫陽花の咲く古寺に人集ふ
 金雀枝の風に吹かれて日の暮るる
 青嵐の安芸の小富士でありにけり
 夏つばめ海岸線を飛びにけり
 青田風納屋の裏へと抜けてゆく
 早朝の厨に母が紫蘇洗ふ
 百日紅咲き満ちてゐる角の家
 絵日傘の遮つてゐる日差かな

美耶

路地裏を低く飛びけり夏つばめ
 黒猫の本下園へと入りゆけり
 青鷺のしほひの園にまだ立ち
 着いてすぐ帰省子に聞く滞在日
 一つだけ買ふと約束する夜店
 箱釣の一匹を手に戻りたる
 柏手の銚の響く山間
 背戸山の昼を鳴きたるつくつくし
 打ち止めを厨に聞いて遠花火
 銀河濃し十軒ほどの村に立ち

森口良樹

東雲に鳴き響きたり四十雀

川べりを歩けば濡れて夏の露

茉莉花の顔郁として耕三寺

釣り上げし魚籠の皮剥目が合ひて

どんぶりをしかと持ち食ふ鰻かな

病棟のあやめ花言葉を調べ

万緑や術後の背ナの伸びて立つ

夾竹桃急ぐ家路に赤く燃ゆ

我のため祖母煮転がす子芋かな

綾乃

梅檀の花から花へ橋わたる

ふるさとの峠を歩けば草薺

六月の谷より霧の立ちのぼる

湯殿より梱めさうなる螢の火

熊鈴を鳴らして歩き雲の峰

夏の雲名を知らぬ木に立ち止まる

萍の水面に雨の降りにけり

縁側も沓脱石も夏の雨

どれもみな一夜に開き百合の花

桑門わかこ

孫の居て色鮮やかな海月見る

甘藍を刻む音する昼餉時

桐咲いて旧家に人の気配なく

向うまで紫陽花の道づきをり

胡瓜漬届けし友の手の皺よ

遠雷に竿の物みな取り込みぬ

灯ともせば林から来る兜虫

夜更けまで話の弾み蚊帳の中

トマトへと太き豚木の立ててあり

宮田保江

道をしへ宙にあるとき胸赤し

取り分けて母の摘みたる萵かな

笹百合の蒼となれる二三本

浜に向け椅子二つ置く海の家

露天湯を出て甘酒を口にする

登山口道を譲れば譲られて

片蔭を乳母車来て道ゆづる

梅漬けてその香に頬の緩みたる

青田風届く床の間磨きたる

山野ウタ

菩提寺の庭をうめたる樟落葉

幼子の上向きに飲むラムネかな

幼子の見上げてゐたる大さな虹

アロハ着て毒々と駈けだす子どもかな

子の齧るトマトに残る大歯形

音立ててころがる雹の降りにけり

切りたての胡瓜一つを口にして

ひまはりやどの花よりも高く咲き

阿姫

縁側で眠る翁に桜散る

病得て今年は種を蒔かざりき

草笛を友と吹きたる帰り道

読経の声の驟雨に消されたる

荒梅雨の暗き田圃を叩きをり

家並は石州瓦夏旺ん

田草取一陣の風吹きにけり

夕食の庭の胡瓜と思ひけり

英一

庭園の掃き目ただしく花は葉に

川下るボートの波が岸洗ふ

擬宝珠咲く退院の日の夜の明けて

蕎麦殻を広げ干したる梅雨晴間

虞美人草コップに差して卓に置く

夕焼の斜めに入りぬ北の窓

支度終へ法事に向かふ日傘かな

山かげに姫紫苑咲き屋敷跡

大橋博子

渦潮を高き橋から覗き込む

行く船の舳先に碎け夏の潮

楊梅の赤き実のある並木道

楊梅の太木ありし母の郷

庭に咲く白百合をまた見てゐたる

夏の草主の居ぬ間に伸びてをり

丈高き葦原に聞く行々子

いつぱいの透明の傘梅雨の駅

大畑恵

白鷺の田んぼに降りて餌を取る

引く水に白鷺の二羽来てゐたる

夏雲の近くなりたる極楽寺

沿道の枝に鳴きをり四十雀

網戸して洗濯物を畳みをり

上島康子

泰山木手の届くほど近く咲く

雨止みて初蟬を聞く夕まぐれ

草むらに螢袋を探しをり

花擬宝珠倒れしままに雨しきり

採つて来てすぐに夕餉の胡瓜揉む

紀英子

柿若葉メトロノームの聞こえる

句会して古書店に寄る夏の暮

雉鳩の声が近くに朝雲

大川を黒鯛上りをり雲の峰

網戸から祖母は田畑を眺めをり

熊谷ゆり子

雷鳴の遠く聞こゆる家路かな

蟬時雨朝昼晩と収まらず

夏雲の高きところが果さかひ

空仰ぎ麦わら帽子飛ばさるる

民

涼しさや千畳閣の黒光り

風鈴を吊るしてよりの雨の音

稚の声聞こえてゐたる網戸かな

高嶋銅代

夏の蝶地面の影に見上げたる

夕焼に飛行機雲は茜色

夕焼の大樹に鳥の集まりぬ

ちかこ

さあここて戸板返しや夏芝居

太き角絡めて投ぐる兜虫

宇品沖夏雲ひとつ止まりぬ

撫子

老犬の前に咲きたる蓮かな

釣竿を振り込む音や雲の峰

網戸へと上つてゆける守宮かな

穂高

夜明けから峰雲の湧くひと日かな

自転車で坂道上がり雲の峰

断捨離をひと休みして新茶汲む

みさ子

玄関の花入れ替ふる梅雨晴間

夏つばめ水路に沿うて飛び交ひぬ

テーブルに麦茶の薬缶置いてあり

やす保

待ち合はすビルの向うの夏の雲

夏の雲跳ねるボールを追ひかけて

網戸から聞こゆる音のいろいろと

山崎桂子

看護士に負けていないよ時計草

阿波久

令和三年六月度作品集より

亜矢 私の選んだ十句

いくたびも老鶯鳴いて石見かな	佐保光俊
薫風や封書を出しに杖ついて	阿 姫
夜の風に公孫樹若葉のさざめけり	井 藤 希
麦茶飲む検査結果を待つ間	栄 吉
大鍋を岩に干しあり登山小屋	知 佳 子
食卓で手紙を書いて梅雨の昼	松田裕子
断崖の笹百合海へ向いてをり	美 耶
水を張る棚田に雲の影流れ	森口良樹
焼きたての食パンちぎる五月晴	綾 乃
青葡萄ボーイソプラノ聴いてをり	高嶋絹代

暁子 私の選んだ十句

夏の灯をともして谷の大屋敷	佐保光俊
薫風や封書を出しに杖ついて	阿 姫
夏の雨二階の部屋に夫のおて	亜 矢
社へと上れる道の著莪の花	井 藤 希
閑職も今は懐かし草むしり	栄 吉
卯波寄す突堤に人立ってをり	す み れ
大鍋を岩に干しあり登山小屋	知 佳 子
蟻の道許せぬ気持ち運んでく	ふ じ 女
若夏の波音とくに高くなる	美 耶
歌ふやうに話す娘や夏来る	熊谷ゆり子